

〔書評〕

杉本 均著『マレーシアにおける国際教育関係——教育へのグローバル・インパクト』東信堂、2005年、xix+455p.

石井由香

本書は、グローバリゼーションの時代のマレーシアの教育制度、教育内容の変化を、それ以前の歴史も踏まえた上で分析したものであり、分析対象は多岐にわたっている。第1部では、高等教育における規制緩和、スマート・スクール、留学等のアカデミックな人的流動、中等理科カリキュラム、教育言語と華人の国際教育ネットワーク、民族統合学校「ビジョン・スクール」構想、高等教育における私学の拡大と国立大学改革（法人化）、高等教育とイスラーム、就学前教育と教員養成システムなどが検討対象となっている。続く第2部では、インドネシア、シンガポール、ブルネイの教育について、比較の観点からそれぞれ章が立てられている。

国家にとって、教育には主に二つの役割、すなわち国民意識などのアイデンティティを養成する役割と近代部門に役立つ人材育成という役割があると考えられるが、複合民族国家であるマレーシアの教育は、マレー人優先という原則の下でこの両方を重視してきたところに大きな特徴がある。しかし、いわゆるグローバリゼーションの潮流のなかで、また特に1990年代以降顕著になった脱・発展途上国という政策的方向性において、マレーシアの教育は、経済的な国際競争に耐える人材育成が可能な教育、また、海外から評価され、人材を引き付け得る教育をこれまで以上に追求するようになった。そのため国民統合との兼ね合いをどう考えるか、さらに微妙なバランス感覚が求められる状況が続いている。

本書の分析対象のなかでは、イスラームの影響に重点が置かれている点が興味深い。国境を越えるさまざまな価値観の流通において宗教は大きな力を持つ。近代教育制度と宗教、またアジア的価値と教育を考える上で、本書での検討は非常に参考になる。

さらに、国民統合と経済的効率化の結節点にある民族統合学校「ビジョン・スクール」の試みについての分析も注目される。マレー語、華語、タミル語の三言語の教育言語別小学校の運営は、多大なコストを伴うことも否定できない。近隣にあるこれら三言語による学校を一つの敷地に移転させ、各校の独立性を維持したまま統合学校として運営を行なうというビジョン・スクールには可能性が感じられる。もちろん、本当に独立性が維持されるのかといった懸念があることも確かではあるが、今後もその推移を見守りたい構想である。

検討対象が多いこともあり、本書では今後のマレーシアの教育が進む方向性に関しては明確な考察結果が示されているわけではない。しかし、筆者が本書のねらいとして述べている「日本人研究者によるマレーシアの教育の描写として、相対的に客観的な視野を提供できれば」（vii頁）という点については、十分に達成されているのではないかと思う。マレーシアの教育の「今」を知る上で、参照すべき著書であるといえよう。